

---

# 外道の王

闘神自殺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

外道の王

### 【Nコード】

N1880Z

### 【作者名】

闘神自殺

### 【あらすじ】

他のサイトでも投稿しています。

PKプレイヤータクの外道にして卑劣なる日々。

狡猾に生きることを信条とする高校一年生のタクはある日……ゲフンゲフン。

## ハイエナ稼業

ある春の日のことだった。

くそドケチな王様に「50Gと銅の剣やつから魔王殺つてこいや」と低姿勢でお願いされた勇者ノックさん。

大魔王はとても強大だ。そして大魔王に付き従いし魔王六将は、一瞬にして天気を変えたり、一瞬にして大陸の形を変えたり、一瞬にして子供の財布から小銭をちよるまかしたりする超強大な魔力の持ち主だった。

スライム相手にすら大苦戦するノックさんは「やだよっ！ 死ねよテメエ！」と、お里が知れるようなスラングかまして首を横に振るが、それまで温和であった王様は直後 顔を鬼のように豹変させ、逆さに落とした親指で首をカツと横に切り、「勅命」を下す。

「そ、そんな……！」

絶体絶命大ピンチ。ノックさんはガツクリ膝を落とし天を仰ぐが、王様はそんな情けない姿を見ても「プー、クスクス」と頬袋を膨らませて喜ぶだけ。

このままでは殺られる。

ジジイのなんとなくな気まぐれで殺られる。

(……どうせ)

ノックさんの眼に微かな火が点った。

(どうせ死出の旅に出されるくらいなら、いつそ……！)

暗い憎悪に燃えたノックさんは、まだ嫌味つたらしく笑っている王様を睨み、懐に隠し持っていた短剣をギュツと握り締めた。殺す気である。

王様は戦闘向きの職業ではないけど、それでも、ゴミのような戦闘力のノックさんと比べればかなり強いし、おまけに、攻城兵器の

直撃弾ですら受け止める不可視の強力な魔導障壁によって守護され、大磐石の構えで下々の輩を謁見に招いている。護衛すら付けてない余裕っぷり。

でもノックさんはそんなこと露知らず、臆することなく前に出るいや、臆してはいたかもしれない。膝が震えている。

『お、往生せいやああ！』

ノックさんは旅の仕度金を受け取ると見せかけ、王様の懐に倒れこむようにして心臓を一撃した。

『ぬわーっ！？』

王様は鮮血に染まる左胸を押さえ、唇を慄かせ信じられないと云った表情でかぶりを振り、後ずさりながら玉座にもたれ掛かり、遂には生命活動を停止 死んだのだ。

『やた！ やったあ！』

死体の前で小躍りするノックさん。

調子にのって魔導障壁に肘が当たり、電撃のようなバチツとした衝撃に「アチツ！？」と悲鳴をもらすノックさん。

ドジなノックさん。

だがそれでも王は死んだ。

玉座の前で果てている。

そして後に残ったのは元王であった男の遺体と……大きな疑問。一切の抵抗もなく強力な結界をすり抜けたノックさんのその腕は、ポタポタと滴る鮮血に染まっていた。

翌日。

【城下街・噴水広場】

『ふん、こんな小汚いジジイの肖像、全部焼いてしまえ』

王様職ゲットして調子ノリまくりのノックさんがそこにはいた。

兵士達に命じて前王の痕跡のいっさいがっさいを城下街の噴水広

場で焼き払い、抵抗する王の側近とその家族を全員縛り首にして、市民に絶対的恐怖を植え付けていた。

【深夜の街外れ・ラーセ教ファルン教会】

『フン、ワシの国に人心を惑わす宗教なんぞ不要だ。この馬鹿でかい教会も焼いてしまえ』

『や、やめてください!!!』

松明を掲げた兵士100名が命じられるまま教会をぐるりと取り囲むと、教会の神父が大慌てて止めに入って来た。

『よいですか！ 我がラーセ教は大陸に本山をかまえる信徒20万人の大宗教ですよ！ いくら王様と云えどこんな勝手はゆるされません!』

『邪魔ナリ!!』

『天よー!!』

ノックさんは腕にしがみ付いて来た神父を強引に振り解き、神父が尻餅を着いた瞬間、腰に提げていた宝剣で額をグサリと突き刺した。

神父は生命活動を停止 死んだのだ。

『やめてください！ なんとということを!』

『邪魔ナリ!!』

『ジイーザース!!』

止めに入ったシスターをバツサリ袈裟斬りするノックさん。

恐るべきノックさん。

悪鬼羅刹と云えど今のノックさんには及ばないであろう。

『王様、中に子供達が大勢います。全員孤児達です』

『フン、移民を片っ端から受け入れるほど寛大な国じゃない。ちょっといい。見せしめだ、焼けイ!』

『あ……は、はい！ わかりました!』

あんまりに無慈悲な命令に対し兵卒は戸惑った。

これでいいのか!!

こんな世の中でいいのか!!

王を止められるのは今ここにいる自分だけじゃないか!?

と葛藤はしたものの、特に自分の胸が痛いわけでもないし、外でチマチマ稼ぐよりかなり割が良い職業なので、兵卒は部下に号令していつせいに火を点けさせた。

八方から火を点けられたたちまち燃え上がる教会。予めたつぷり獣油をかけた純白の壁は無惨にも溶けて焼け落ちていく。

『ぎゃあああ!! 熱い! 熱いよおお!』

『出して! 出して! お願いいいー!!』

遠巻きに見ているだけでも肌を焼くような劫火が教会をゴウゴウと燃え上がらせた。赤く染まった教会からは、耳を塞ぎたくなるような子供達の悲痛な叫びが漏れて来る。

『おい!』

『は、はい』

ノックさんが、羊の毛並みをしたカバのような体格の馬上から軽くアゴをしゃくると、長槍を構えた武装騎士が、火に追われ外に逃げ出そうとする子供達の手や顔を次々に突き刺した。

顔を出せば殺されると解っていても熱や煙に追い立てられた子供達は苦しさのあまり耐え切れず、留まることなく手足を隙間から這い出させ、そして無惨にも殺されていった。

『ぎゃっはっはっは! あー、おかし!』

オンラインRPG・YMR。

壮大なる世界の一端で起こった1つの物語の幕開けであった。

俺はタク。高校一年生。

ちよいと理由があつて”今作の”YMRは初心者で参加している。今は自宅の自室に籠もり、パソコン画面を通じて、キャラクター・

エディットで作成したキャラをオンライン世界の待合広場で試しに操っている。慣らし運転中というヤツだ。

蹴り、蹴り。

フック、ジャブ、ロシアン・フック、ジャンプして二階の縁にブラコンと掴まり『ブラニサガリ（高位のジェダイのみが使える必勝闘法。ブラ下がった状態から敵にカウンターを仕掛けるという、死中に活を見出す一発逆転の大技）』。

チュートリアルで前作との動作の仕様変更を一通り確認した俺は、受付に敷設されている転送機の画面から契約したサーバーを選択し、画面に表示された島内マップを指でなぞってカーソルを移動させ、安全そうな転送場所を選んで決定ボタンを押した。

青紫色の無数の光の輪に全身が覆われると、体が光の粒子へと換わり、大きな光に包まれたかと思うと、次の瞬間には転送先の街役場に立っていた。

『はいはい！！ ガルンド城塞攻略イベント受付終了です！ 次の番号札をお持ちの方どうぞ！！』

『再審の申請書ですね？ 受付カウンターの三番へとお並び下さい！！』

『おい、さっきここに並べって言われたぞ！？』

『お客様、クレームなら七番の』

普通の市役所みたいな街役場では、叩き売りでもやってんのかと云う物凄い喧騒で荒れていた。

十五階建ての白亜の施設に常駐する十数名の警備スタッフは一般プレイヤーから有志を募ったボランティアで、数世代前から連綿とYMRの歴史を築き上げて来た魔王殺しでありドラゴン殺し……そんな精鋭達がタジタジになるほどの超混雑っぷり。

安全ニ公共施設 は、考えが浅薄だった。

次からは移動場所をさらに一考するでしょう。

イベント申請やクレーム対応などでごった返している役場からど

うにか外に抜け出た俺は、各所に設置された案内板に従い、この国の中央に位置する公園の噴水広場を目指す。何もしてないのにもう疲れた気分だ。

空は一点の曇りなき青空だった。

チリひとつ無く、整然と舗装された石造りの道。

陽射しに映える周囲の緑が目眩しい。

水源が豊富なこの土地では街中の移動に小船が使われることも多く、船が通れるように道の至る所にアーチ状の橋が架かっている。

その橋をいくつか渡ると、広大な森林に囲まれた公園の噴水広場へとたどり着いた。

空色の大階段から一望した広場はかなり見通しが良く、もしイカしたヤヴァイのが「死ねやオラ！」と襲ってきてても一目散に逃げる事が出来るだろう。そこかしらに散見するカップルは不快だけど、人の流れも多いし、とりあえずの安全地帯と言える。

(ちよつと話しかけてみるかな?)

ひさしぶりのオンゲだし対人の感覚を掴みたい。

俺は周囲を見回し、最初に目に付いた木陰の静かな場所に移動した。

『あの、少し訊いていいですか?』

『ン? なに? どうしたの?』

いきなり上級者に話しかけるのは少し腰が引ける。街灯の前のベンチで退屈そうに足を遊ばせていたアマゾンに軽くアプローチしてみた。

『初心者なので、もしよろしければ、この街のことを教えて頂けませんかでしょうか?』

『ン〜……どうしょ? ねえ、ミッキー?』

断じてナンパではないが、誤解したアマゾンは少し照れたようなモジモジした風な態度で後ろに隠れていたゴツイのに話をフツた。

手招きされてのっさり出て来たソイツは、亀の甲羅を連想させる重厚な緑の鎧を着込んだ大型の戦士だった。

(遠くに立ってたから他人かと思った)

『べつにいいんじゃないかな？ 初めまして、<sup>グレート・ソルジャー</sup>超戦士』をやってるミッキーです』

『あ、どうも。騎士の<sup>ナイト</sup>”タク”です』

『超戦士』とは、ギルドに所属する戦士が五度のジョブチェンジを経て成る、戦士系の最強キャラ。最低でも1500Lv以上ということだ。

コイツと比べりゃLv2の自分なぞ虫ケラ同然。

まさに雲の上の存在。

『ハハツ、緊張しないでいいよ。べつに取って食おうとしてるわけじゃないしね』

大仰な外見の印象と違い、ミッキーは意外と礼儀正しい人だった。可愛らしい名前からして女性かな？

少し年上かも。

『この国は大陸から南東に位置する孤島で、経験値稼ぎにもってこいのモンスターが棲息するダンジョンがあるから、けっこう人の出入りが多いわ。ここでしか取れないレアアイテムも多いし、彫金に最適なレアメタルも発掘されるので貿易関係でも潤っている。でも最近王様が代わってから、島外の別のサーバーからの新規流入者が減ったの。王様がムチャクチャ言っつて、街中での”PK”』

戦闘向けじゃない一般プレイヤーへの攻撃まで推奨してるから、略奪があちこちで多発してる』

『この辺りは中立地帯だよ。噴水広場を挟んで北側に王都があつて、その王都を茎として扇状に右から商業区、ギルド、闘技場、市街、海商区、高級住宅街があるわ。それぞれの区には元締めがいて王様でも勝手は出来ないの。今のところ城下街でしか酷い政策は打ち出されてないわよ』

ミッキーに続いてアマゾンが親切に教えてくれた。

『まだレベル低いみたいだし、キャラ捨てて別のサーバーに替えれば？』

去り際にそうアドバイスしてくれたアマゾンには、余ってるからと言って、俺に『クリスタルソード』を渡してくれた。

感謝……圧倒的な……ツツツ！！

俺はその場に膝を着き感涙した　フリをした。

それを見たアマゾンがギョツとして、ミツキーに隠れながら小さく立ち去って行ったのが何か心に残った。

『クリスタルソード』ってのはそう珍しくない武器だ。

魔法によるステータス異常を半減、または無効化させられる安定した特殊能力あり、魔法を使えない戦士系のキャラは中盤でけっこう重宝する。確か売ればそこその金になるはず。貰ったモン即行で売るほどセツパ詰まっちゃいけないけどな。

さあて、そろそろ始めるか。

俺の得意とするクソ外道プレイを。

用心深く執念深く、下品で陰湿で卑劣で、それでいて超然としてこそこそアイテムを横盗りしたり、弱っている人間を後ろから不意打ちで狩る『ハイエナ・スタイル』だ。

そして、そんな周到な俺が操作しているキャラは見た目どおりのへボキャラではない。前回のYMRキャラを特殊なアイテムで今作へとコンバートしている。

宝石など金目の道具を大量に持たせ新規に引き継いだ俺の”タク”は、能力値補正アイテムをありったけ購入して1つの能力値だけを突出させ強化している。

スピード　逃げ足を。

このキャラ、外見こそザコそのものだが、足の速さ”だけ”は天下一品。横からアイテムをかつぱらって、特に足が速いとされる高レベルの忍者や盗賊なんかに追っかけられても、そう簡単には捕まらないだろう。

高校受験のために10ヶ月遅れで参加を果たした俺がてっとり早く強くなるためには、多少の奸智を働かさねばやっていけないのだ。だから俺は謝らない。

さっき話したミッキーとアマゾンのように、誰か強いキャラの後ろにひつついておこぼれを戴く。そんな生き方もあるだろうが、それは正直嫌だ。受け入れられない。人に媚びるぐらいなら殺して奪い取る方がいくらかマシだ。

俺は殺られるのは好かないが、正直”PK”は上等である。

クリスタルソードは今のところ必要ないので、近くに居た初心者っぽい騎士に5000ボルふっかけて売っ払い、その足で城壁の外冒険の舞台へと旅立つ。

フィールドに出て何度くらい罵声を浴びただろうか。一撃喰らえば即死確実の雷撃や火炎、斬撃を避け、黙々とアイテムを集めては売り払い、たまにレアアイテムが出ればとりあえず貸し倉庫に突っ込む。

そんなこんなで半日も繰り返せばひと財産。どうにもならないイレギュラーで一度死亡したが、金はこまめに預けてたのでマイナスは少なかった。

『ふふん　ぬふふふん』

荒稼ぎして意気揚々と帰還した俺を待っていたのは　犯罪者としてのレットルだった。

城門前の街役場の掲示板では、王殺しや国際テロスト犯などのそうそうたる超A級極悪人どもといっしょに、いつの間撮られたの俺のキャラのキャプチャーが張り出されていた。

意外に早かったが予想していた結果だけに苦笑しかこぼれない。  
俺は完全にお尋ねモンになったのだ。

WANTED 賞金3600ボル  
ハイエナのタク（騎士）

久しぶりのネットゲだったし、終始追っかけ回されて精神的に疲れた。手持ちの不要なアイテムを換金して銀行に預け、俺は早々に口グオフした。

今回は強化アイテムを購入した差し引きで、収入は1万7000ボル。初期にしちゃ悪くない。その中で消費レア・アイテム『死神の怨讐』と『護りのタリスマン』を手に入れた。

『死神の怨讐』は、使用すると自分を殺した相手の居場所をどこにいても捜し出すアイテム。『護りのタリスマン』は、アイテムソケットに突っ込んでおくと、死亡時のアイテム損失や経験値ゼロや所持金半分などのマイナスペナルティを受けずそのままの状態で蘇生する。どちらも使えば無くなるが、レア度は十段階の評価で星五つ。

悪くない。満足満足だ。

予想以上の釣果に頬を緩ませ、俺はPCの電源を落とした。

残念ながらゲームが終われば作業ゲーのような日常が待っている。汗かいてたからまず軽く風呂入って、それからメシ食いに外出した。ファミレスでメシ食った帰り道にコンビニ寄って、烏龍茶のペットボトルとビーフジャーキーとジャンプ買って、商店街のゲーセンで新作の格ゲーちよいとつまみ食いして、それから家に戻る。

「ただいま」

誰もいない薄暗い玄関。

両親は共働きなのでけっこう家を空ける時間が多い。

居ないと知りつつも帰りの挨拶を欠かさなのは寂しい現代っ子の

サガと言えよう。

二階の自室に戻り、PCに電源入れてBBSをチェック。スレッド形式の掲示板を流し読みしていると、俺の名前がほんのチラリと  
だが載っていた。

【獅子王】

足の速いのにいきなりやられました

【桂歌麿】

最悪だな 今度見かけたらシメときマス

【獅子王】

きつと寂しいヤツなんだよ

【ジャクソン5】

つうかあの島PK多くね？

【ひゅんける皇帝】

難易度も鬼高い

レベル732の聖騎士が地下4階で鬼蜘蛛の大群にウボア

【ドモホルンリンクル】

誰か輪廻の数珠玉ゲットしてね？

最後の一個手に入らんわ

ふむふむ……。

まあ初日だし、悪評はこんなところか。

気に入りのエロサイトを巡って更新をチェックしてからメールB  
OX見て、今度こそ電源を切った。

マジで疲れた。

もうオナニーすんのもめんどクセえ。寝る。あした学校あるし。  
じゃあな、暗転だ。

翌朝。

俺は学校での時間も惜しみ、持ち込んだモバイルでキャラクターの効率的な動作を模索し組み合わせていた。

キャラクターは別売りのツールを使用すると細分化されたモーションを選別して、他人のキャラクターと挙動を差別化することができる。数百種類の動作の掛け合わせ組み合わせでアルゴリズムを組み、自分だけの完全オリジナルキャラクターを作成するのだ。

少し難しいことを言っているみたいだが実際使い慣れればそんなに苦労しない。素人でも、一日いじってれば簡単な動作を組めるだろう。こんな感じにカユイところに手が届く仕様がこのゲームの人気のひとつでもある。

俺は自作のパッチを当てて自宅パソコンのUSBを通じモバイルにデータを送信した。今はそいつで少々念の入った『コンボ（連続技）』を組んでいる。

逃亡専用動作を。

### 【土下眠】

かのロシアンファイターが慣行した、文字通りうつ伏せに寝る、土下座を超えた究極至上の謝罪。

デフォルトキャラは腰より下への攻撃は簡単に出せないから緊急回避としてはもってこいだ。

### 【土下眠ローリング】

土下眠のまま横に回転する、修学旅行の就寝時などで、ちょっと浮かれすぎな奴がやらかす高速回避運動。

### 【目潰し】

対象に砂をかけて逃げる。

### 【目潰しダブル】

対象に連続して砂をかけて逃げる。

### 【肛門エクセレント】

組み合わせた指先をドリルと化し、敵の肛門を破壊して便秘にする（ゲーム内はリアルを追求しているので食事や排泄や就寝まで設定され、日常習慣を怠るとパラメーターに影響する）。

プログラムが大方組み終わる頃には学校が終わり、俺は迷わず家に帰った。

「ただいま」

誰も居ない家で挨拶を欠かさない。

アイ・アム・寂しい現代っ子。

部屋に戻り、制服の上着をハンガーに掛けるついでにPCの電源を入れた。SSDで高速起動のパソコンだ。あっという間に画面にOSのロゴが浮かび上がり、YMRに関するプログラムが自動で開始する。

苦心して組んだモーション・プログラムをプロパティでキーボードの各キーに配置し、軽く動作チェックしてみる。極力無駄を排した俺の”タク”は、予想以上とまではいかないが、なかなか鋭敏な動きを魅せた。

準備万端抜かりなし。俺は拠点としているメインサーバーを選択してキャラクターを起ち上げた。

さあて、現実逃避タイムといきましょうか。

『しまった……』

うっかりして、昨日と同じ街役場を転送先に選んでしまった。

昨日やってみた”貸し倉庫1日無料体験”が満足だったので、直接海商区に跳んで月極契約したかったんだが……この失敗で目的地まで遠回りになる。面倒クセエ。

### 【海商区湾内】

貿易の要である海商区では、外敵に備えたマリン・ブルーの長大かつ重厚な壁が湾を覆うように続いている。

二大陸の中継ポイントに位置するファルン貿易港は、安全な貿易を望む多くの取引相手から要衝としての機能を求められ、そうした”篤志家”から集められた巨額の資金によって世界有数の強大な軍を設立し、万里の長城を思わせる巨大な壁を建設し、鋼鉄の戦艦を撃ち貫く『魔光砲台（魔力によって熱閃を放つ長々距離砲）』数百台を備え付けることで”最低限”の自衛措置を採っている。以上、タテマエ終了。

湾内で特に盛況なのは、大陸から輸入されたブランド品を扱う卸売り市場で、異国の非常にめずらしい一品モノの装飾品や武器が手に入る場所なので、アバターのファッションに命を懸ける御嬢様方や冒険者が殺到し、ボサツと立っていると人波に押し流されてしまいそんな活気がある。

船着場の方を見ると、大型重機を彷彿とさせる身の丈40m級の巨人族が、西洋風の屋敷を丸々抱えてガレー船から降りようとしていた。巨人族の歩みで船と港と繋ぐ木製のタラップが大きく沈み、それを見た周囲の作業員は蜘蛛の子散らすようにワツとその場を離れた。

さすが、他民族、他宗教が交差する世界の<sup>クロス・ポイント</sup>中継地点だ。他にも大勢めずらしい種族が集まっている。

たくさんの樽の上をチヨコチヨコと走り回る三匹組みの『<sup>ラン・ライダー</sup>走蜥蜴』、シースルーの薄手の布を肩から膝下まで下ろす、麒麟のように首長で、顔の周りに花弁を付けている不思議なヤツは『華花々（ホワンチャイ）』だ。おっと、人型の鉄塊を操って木箱の中身をセツセ

と荷詰めしているのは、体長10cm足らずの甲虫、1つ目の『機  
甲族』だ。あいつらも珍しい。

『おお……!!』

『魔族だ!!』

港の端の方で大きなどよめきが立つ。

船の替わりに港に就いたのは鯨のように巨大な怪魚だった。その怪魚の大口から、黄昏色の優美な法衣に身を包み、トーテム・ポールのような縦長の頭を持つ『皇魔王』<sup>ウォッチャー・キング</sup>が悠然と現れる。

”皇魔王”とは、かつて大魔王が従えていた六将が1人　光滅の魔王『ウオツチャー・キング』。……確か、数ヶ月前に大陸のどつかの冒険者一団がイベント発生させて、それ以降は人類サイドに味方するようになったとか。

引き連れている配下はNPC（プログラムによって行動が既定されているキャラ。YMRのシステムならワリとフリーダムな反応をする）で、日輪を象った金色の杓丈をついているのは蛇髪の『土蛇族』<sup>メシ</sup>、熱帯魚みたいにカラフルな鱗の半漁人っぽいヤツは『海鱗族』<sup>デイープ</sup>、虎縞の青い体毛に、三本の大きな犬歯が胸元まで伸ばしているのは『獣牙族』<sup>ワウグ</sup>　その他、人間種じゃないのが怪魚の口からゾロゾロ出て来る。

皇魔王がファルンに寄港するに当たって、ネット掲示板じゃ、ファルンの六将と一戦やらかすんじゃないかと盛り上がっているが、諸国を回遊し続けている行動の真意は未だ謎だ。

こうして見ると前作からの引継ぎキャラも大勢いる。

種族の見本市みたいな場所だし、たぶん一日中見ても全然飽きないだろうが、残念ながら今は用事がある。俺は後ろ髪引かれる思いでその場を後にした。

人だかりを抜けて埠頭の南端に着くと、海のように青い屋根が眺望できる『貸し倉庫街』へたどり着く。

物々しく重厚な兵装の騎士とゲートで監視している貸し倉庫街は、海商ギルドが一括管理しており、俺は受付で持ち主に賃金を振り込んだ。

自動振込みにしてもいいが、ギルドや貸し金の勧誘が鬱陶しいので遠慮している。

賃貸料は月に5万5000ポル。

けっこう……安くない出費だ。

だが安場の倉庫では窃盗に遭うことも珍しくないので必要経費だ。こんな治安の悪い……俺のようなPKがうるついている国では特にそれに、ゲートを護る兵が世界最強の『ダチカン竜鬼兵』であるということを考えれば安いものだ。ただの一兵で千もの兵と互角に戦える海竜の軍団。俺も一度イベントで遭遇したことあるが眉唾ではない。

いつだったか、緑青色のフルアーマーを着込んだ、戦車を彷彿とさせる超重装甲の騎士が一撃で戦況をひっくり返したのを見たことがある。

今思い返しても不思議だった。

ダチカンが放ったアレは何だったのか。

目の前で冒険者の一団が音も無く倒れた“アレ”は。

そのうち自分の倉庫や自宅を持ちたいが、今はそれに掛かる費用分、自分を徹底して鍛えることにしている。

俺はキャラを巧みに操り、盗人やPK、宗教やギルドの勧誘者と距離をとりながら何事もなく街の外へと出た。

城下町とは対照的に緑が極端の少なくなる荒涼とした山岳地帯。ザラザラとした岩肌に沿って、なるべく強力な魔物が出没する場所へと向って歩いた。

昨日半日遊んで解った。このゲームの性能は前作と比べ物にならないほど向上している。

操作に慣れるにはまだまだ時間が掛かるだろうし、となると単独でパーティーをストーリーキングするにはリスクが大きいと思う。

ならば相手が多少高レベルでも構わない。包囲網を作れない単独プレイヤーを狙って自慢の脚でお宝の略取を狙う。ちまちま稼いで目を付けられるより、その方がよっぽど安全だしな。

そんなことを考えながら二時間ほど経っただろうか　目の前で突然声が響いた。

『あの、すみません！』

その声は個人宛ではない全体へのメッセージで寄せられたが、近くには俺しか居ないので声の主は当然俺に話しかけたことになる。

『すみません、誰かいますか！』

『……はい！』

俺は不審に思いながらもつい好奇心に負け、声の元を探って林の方へ踏み入った。

枝葉の少ない細い木々が高くそびえ、その狭い間を数十も歩かない内、急に視界が開けた場所に出る　とそこには、沸騰したように泡立つドス黒い沼地が視界一面に広がっていた。

ボコボコボコ……ボッコチャン……！

『……えっ？』

今ボッコちゃんて……？

いやそんなことより、タールのようにネットリとした真つ黒な沼地の淵に白銀の鎧を纏った屈強そうな神騎士パラディンがうつぶせに寝そべっていることの方が問題だ！

何やってんだこいつ？

身動き……取れないのか？

手足をカサカサさせてたから一瞬白いGかと思った。俺は頭の上

に疑問符を浮かべつつ白銀の神騎士に近づいてみる。

『あの〜、なにかありました？』

『よかった！ す、すいません、そのの……なんか黒い場所を通ったら急に倒れちゃって。ずっと動けないんです』

『……………』

神騎士がウンウン唸りながら言った”黒い場所”とは、マヒの沼のことだ。短時間なら問題ないが長時間ガスを浴びると文字通りマヒ状態に陥る。

神騎士と言えば俺の扱っている騎士の最高ランクに称された伝説のジョブで、おまけに身に着けてる装備の数々は一見するだけで解るくらいの超レアモノ。以上の外観から判断するに目の前の神騎士は超上級者のはず。

でも神騎士<sup>コソツ</sup>クラスでマヒの沼に引つかかる奴なんて嘘でも聞いたことない。マヒの沼とはそのぐらい初歩的なトラップなんだ。説明書にだって回避方法やマヒを受けた後の対処法などがいくつも書き連ねている。

たぶんコイツは、かなりやりこんでいる常連の誰かからキャラクターを受け継いだばかりの……初心者だろうな。

『すいません！』

『あ、はい』

『もう二時間もここにいます。これって機械の故障とかでしょうか……？ お兄ちゃんが留守の間にパソコンをいじってたらこんなことになって……………』

『それは大変ですね』

俺はそう相槌を打ちながら、倒れて動けないでいる神騎士の前でおもむろにしゃがみ、ガスを浴びすぎないように気を配りながら装備品の物色を開始した。

『ちよ、ちよっと！ なにをしているんですか！？』

神騎士はびっくりして必死に身をよじる。

まあ無理もない。

救いの主が追いはぎを始めたのだから無理もない。

ま、だけど初心者には親切にすべきだ。

俺はその精神に則って一応答えてやる。

『うん、窃盗』

『な……！？』

俺の酷薄な台詞に神騎士は息を詰まらせ言葉を失うが、そんな反応されても一向にかまわない冷酷無比な　ある意味ゲームとして正しく外道キャラになりきっている俺は、興奮する気持ちを抑えられず、脇目も振らずとにかく片っ端からアイテムウインドウにお宝を移動させ続ける。

画面の右隅に映るマップを見ても近くには誰も居ないし、超豪華なお宝を余裕で独り占め。宝クジにでも当選したような絶頂気分だ。

『やめてください！　これ、お兄ちゃんの勝手に使ってるだけで、

私のじゃないの！　お願い！』

『あ、そう？　じゃあ、お兄さんが悪いよ。パスワードの管理に不備があつたんだ。ま、お兄さんが間抜けだったということだ』

『本当にお願ひ！　やめて！　だれか！　だれか……！』

『無理無理。いくら大声で話しかけてもマップ上に誰も映ってなきや絶対に届かないって。悪いけど、こういうのもゲームの内だから』

『……』

神騎士はあきらめたのか返事をしなかった。

気の毒ではあるが悪いとは思ってないしやめる気もない。

ハハッ、こんな楽なハイエナは初めてだ！

意気込んでキャラを強化した甲斐が無いつてもものだね。

現実世界の俺は椅子のリクライニングを利かせながら缶コーヒを啜る。余裕たっぷりクソガキっぷりである。

だが俺は忘れていた。

あまりの幸運に気を取られ周囲の警戒を怠った。

長いブランクの所為か……忘れていた。  
ルール無用のこの世界では、ほんの些細な油断が命取りに繋がる  
ということにパーフェクトに忘れていた。

突如、画面上の右隅から蜂の巣突付いたように増大する赤の光点。  
それも1つや2つなどではない。10以上もの大群。それは出現と  
同時に一直線にこちらに進路を向けた。

赤色の表示。

それは俺の御同業……頻繁に”PK”を行うプレイヤーを意味し  
ていた。

「な……やつべー!?」

気付いたときにはすでに遅い。

俺と神騎士を囲む敵の包囲網はきつちりと組み上がっていた。

### 【暗黒司教あんくくしきょう】

LV3650

初期の修道士からカルマを重ね闇属性に転じると、魔神崇拜を教  
義とする闇の司祭となる。

魔神の加護によるステータス補正。

攻撃魔導に長けた魔術のスペシャリスト。

司教クラスへの転職は信徒の投票によって選任されるので非常に  
難易度が高い。

### 【邪覇剣士じやぱけんし】

LV1570

LV270

中級レベルの魔王を単独撃破した者にだけ与えられる特殊ジョブ。  
呪われた全ての武具が装備可能。

騎士系では神騎士と双壁を成す剣士の最高峰。

ダイナソー・マスター

【竜調教師】

LV1230

LV911

LV822

ドラゴンを操り敵と戦うトレーナー系のジョブ。

調教したドラゴンは種類によって騎乗も可能となる。

ドラゴンはモンスターの中でも最大クラスのステータスを誇るが、育成に掛かる莫大なコストの高さから上級者向け 貴族の職業とも呼ばれている。

調教中のドラゴンに食い殺されたり、逃げられたり、盗賊に奪われたりリスクも高く、一体の竜を成竜にするまでに最低5千万ボルから500億ボル以上(100ボル=1円)も掛かる。調教済みの成竜は非常に高値で取引されるため、投資としてこの職業を選ぶ者もいる。

【ハイ・エルフ】

LV1418

LV1103

LV854

LV645

LV888

銃や弓矢などの軽量の飛び道具を得意とし、補助系魔法とスピードに長け汎用性が高いジョブ。

ハイ・エルフでパーティーを組むと大きな加護を得る。同族の数に比例してHPの増大、MPが少量ずつ回復、ラック上昇、経験値アップ、甦生率アップなどのプラス属性が付加される。

「……困まれたか」

俺は表向き取り乱さなかったが内心かなり動揺していた。

連中はゆっくりと確実に包囲を狭めて来ている。

まるで遊んでいるよう。

俺の貧弱な装備を見て、もしくは能力値を魔法で確認して、連中はさぞかし見下しているだろう。

だが……舐めるな。

レベルの差や装備の差が勝敗を左右したのは前時代のこと。互いに向き合って立ち止まり、HPの削り合いで勝敗が決したのは前時代のこと。

たとえ身体能力は未熟なれど、極限まで鍛え上げたプログラミン  
グ技術と操作技術は圧倒的物量差をも撥ね返す力となる。

『死ねやハイエナ野郎!!』

リーダー格っぽい暗黒司教が振りかざした号令の下、統制の執れた横一列で一斉に射撃を開始したハイ・エルフの射手。飛び道具を得意とする奴らハイ・エルフは30mほどの長距離からでも正確無比に矢玉を放つて来る。

いくら何でもその距離で当たるかよ。

林の隙間を狙って雨あられと降り注ぐ矢を軽く避け、俺は射線を  
ずらしながら、さらに視界の悪い森林の中へと逃げ込む。

踵を返す直前にチラツと見えた。

白銀の神騎士 いや、装備全部取っ払ったからパンイチのノーマルか。白ブリーフ一丁のそいつが邪覇剣士に黒刀を突き立てられ、きつちり止め刺されるのが見えた。

連中はすぐに俺を捕捉してきた。

竜調教師が解き放つ小型のドラゴン二頭が左右に散開して挟撃を仕掛けてくるが、俺の脚がそれをさせない。左右に大きく膨らんだ敵の包囲網を鍛え上げた鬼脚でグングン引き離す。

俺の脚に追いつけず、近距離視認用マップ上から敵の後続が次々に消えていく。

『この野郎！ アイテム置いてけや！！』

『それ、いくらすつと思つてんだ！』

特に厄介なのはハイ・エルフのスナイプ野郎。とにかく脚が速くて、追いつかれこそしないものの引き離せない。遭遇した戦闘中のパーティーに突っ込んだり、モンスターの群れに突っ込んだりしてなんとか撒こうとするも、一定の距離を維持され追跡を振り切れない。

徒党を組み略奪を生業とするプロの狩人ども。

腕はそれなりに……ということか。

仕方ねえ。まずスナイプ野郎どもを個別に叩く。

俺は後続を十分引き離したことを確認し、方向転換して横道に逸れた。一直線に光の射す森の外へと向かう。

『なる、逃がさねえ！』

『戴きます』

俺が横に移動したロス分だけ一気に距離を詰められる。だが横一列に並んでいた連中は射線上に一部仲間を配してしまったために弾幕が薄くなる。

列が整う数秒の時間に体勢を整え、正確に狙って来た左翼からの狙撃を、俺は大技『土下眠・ローリング』にて緊急回避。「わーい」と言いながら敵の懐に転がり込み、立ち上がると同時に、右端に位置するハイ・エルフ手首を掴んだ。

『わ、わ！！』

完全に不意を衝かれ、驚愕した顔で反射的に握られた手を引くハイ・エルフ。仕掛けた俺は当然ながらその反応を読んでいた。柔術でいうところの”崩し”を仕掛ける。

クンッ

力の流れに逆らわず、手首を極めながら相手の懐に飛び込み、捻って体を崩し、頭から地面に叩き落とす。

完璧なタイミングで入った”崩し”によって、ハイ・エルフは首からゴキツと小気味のよい音を響かせた。これぞ相手の引く力や押す力を利用した『柔』。

俺は起き上がるうとするハイ・エルフの胸板をおもいつき蹴り飛ばし、即座に馬乗りになる。見下ろし型の視点をワンクリックでキャラの視点に合わせ、喉元にナイフを突き立て『カット・スロート』。『一撃必殺』成立である。

1ケタレベルのカスプレイヤーが100倍以上もの力量差を埋めたその事実を目の当たりにし、PKグループを取り巻く風に変化が起こった。子鼠を追い立てるようなハイ・エルフどもの拙速な陣形は警戒に歩を緩め、俺とわずかに距離を置く形で停止する。

『ほう、『やわら』を使いおるか……』

ハイ・エルフの1人に年寄りじみた言葉で感心された。

律儀な俺は言い返してやる。

『まあな』

まだまだこれからだ。

後続が追いつく前にコイツら全員仕留める。

完殺する。その自信はあるんだ。

Lvを上げることによって身体能力は向上するが、肉体そのものの強度は基本的に1と100のLv差があろうと大差ないのだ。防具の隙間から急所を突けば、種族や個体差は勿論あるだろうが、相手は確実に死ぬ。三寸斬り込めば人は死ぬのだ。

そのためか冒険者は優れた武具を求める傾向が強い。

だからこの世界での武器防具の地位は想像以上に高く、現実で高額でのやりとりもめずらしくない。小銭欲しさに俺が外道プレイヤーになるのも無理からぬこと。

俺はフツと息を吐き”キャラの呼吸”を整えたと、血塗れのナイフを逆手に持ち替え、ハイ・エルフ達に襲い掛かった。

『目潰しダブル!!』

『ぐわッ!? き、汚エぞッ!?』

俺は地面の土をすくって手近の連中に投げかけた。  
不意を衝く右手左手の二連続技に敵はメツチャ怯んだ。

『よっ!』

眼を覆うハイ・エルフBの手首を素早く掴み、グツと引き寄せて  
から肘を逆関節に極め、そのまま背負い投げで頭から落とす。

『シッ!』

地面に落ちる寸前の頭を狙い済まし、ナタを振り下ろすかのよう  
な切れ味のロー（下段蹴り）で無防備な頭部を蹴撃。

ビッキイッ!!

『ガッ!?』

ハイ・エルフBの頭部が弾け飛んだかのように大きくブレた。

これぞ陸奥千年が成せる奥義……『雷<sup>いかづち</sup>』!!

普通に硬い地面に落とした方がダメージでかくねとかいうツッコ  
ミはさておき必殺の一撃。防具に護られてない頭部 頸椎へのダ  
メージを狙い打った完璧なクリティカル!! だったが高等種族の  
持つ肉体の基本スペックの差はやはり埋め難く、この打撃を以って  
しても致命にはだいぶ足りない。

『くう……こ、この程度で参るとでも思ったかよ!!』

『思わない』

簡単に倒れてはくれない。

前回から次いで戦っている俺はそれを充分承知している。

俺は起き上がりを狙って、ハイ・エルフBの鼻面に全体重かけた  
膝小僧を叩き込んだ。顎先が撥ね、視界が一瞬泳いだ相手の背後に  
廻り、ナイフを首筋に立てる。

『ほいつ、頸動脈いただき!』

ハイ・エルフBの後頭部に添えた手を前に押し出し、首筋に刃物  
を這わせる。一般に、首を掻き切るときは後ろに反らせるのではな

く前に倒す方がより効果的で、YMRの驚異的な物理エンジンはその効果までをも読み取るのだ。

パツクリと開いた首筋から水鉄砲のように赤い筋が噴き出し、一撃必殺を認定されたハイ・エルフBの体は俺の手の中でビクンビクンと跳ね上がった。

【ファルン王国・王宮灰色の尖塔・隠し執務室】

フィールドマップ上の端の端、大陸より南東に位置する島国

『ファルン王国』。

逆賊の謀反によって国主を討たれ、その後は落日を見るが如く果て無き衰退の一途を辿っていた。

前王の死後、恩赦により牢獄に繋がれていた多くの罪人は野に放たれ、徒党を組み再犯に精を出している。

治世は乱れ、人心は腐敗し、人口は瞬く間に半数以下の24万人にまで減少。重税に略奪。金子によって判決が左右する不当な裁判。新天地を求めサーバーを移る者が日に数百人以上。それも日に日に増え、人口減少の傾向は天井知らず。そしてそれは、堅牢なる城壁に護られた城内でも同じであった。

暴徒に金品を持ち出され壁紙まで剥がされ、瓦礫と埃にまみれた兵どもの夢跡のごとく荒れ果てた城内の一角では、いまだ平和への願いを捨てきれず孤軍奮闘する数名の義士らが集っていた。

エルメスである。

ザクタンクである。

ギボである。

彼女ら三人はある目的でこの国の中枢に根を張っていた。

王が謀殺された直後に発生した大暴動。その混乱にまぎれ謁見のチャンスを掴んだ彼女らは新王ノックに能力を買われ、即行で国外脱出を果たした政治屋の代わりに即日要職へと駆け上る。

過程はともかく形だけ大臣となった三人。

課せられた初仕事は数万数十万とも推定される暴徒の鎮圧。

密約により強力な私兵を擁する海商王を動かし、祭りに参加したがる兵をアメとムチで統制し、アホな国王を丸め込んで事態を上手く収めた彼女達は今、城に併設された螺旋階段が続く塔の五階、数人どうにか立って居られる程度の狭い隠し部屋に一同は介していた。姿かたちは見えない。

代わりに部屋の中央を占拠するのは、小汚い頑丈そうな丸机の上にもロンほどの水晶球が三つ。水晶の中にはぼんやりとゆらめく人型の映像だけが浮かんでいる。

それは映像と音声を伝達できる”風巻きの魔導球”。

十段階に設定されているレア度で八を数える密談用のアイテム。たがいが認証しなければたとえ部屋の真ん中で聞き耳を立てようと、いかなる魔導や道具を用いても音声映像は他に漏れることはない。

エルメス『なんかヤバイですね、この国』

ザクタンク『海外のBBSでも凄い盛り上がってましたよ。……史上最悪の”暴君”って、ゲーム雑誌の『死ねこの野郎 読者が選ぶ最悪プレイヤーランキング』にも入ってるし』

エルメス『城で働いていた人もだいぶ少なくなっちゃって、ずいぶん寂しくなりましたね。公園広場で革命の集いを宣言する張出しがありましたけど、どうせあれも鎮圧されるんでしょうねえ』

ザクタンク『アイツらがいますからね。国王直属の最強十二の円卓の騎士!! なぐんで聴こえはいいですが、ノック王が”エドの祠”の独占探索権を与え飼いならした無頼者の集まりでしかない』

エルメス『王様が率先して賄賂やってんですから、みんな上に倣っちゃって。いま行政に残ってるのは利権絡みで懐を潤す狒々どもしかいない』

ザクタンク『由々しいですな』

エルメス『いやいや、まったく』

ザクタンク『でも王様が流入者をカットしたお陰でサーバー全体が軽くなった感じがするのはいいですね』

エルメス『鬱陶しい勧誘の類もだいぶ減りましたし、探索者の大幅加入でダブついていたレアアイテムの貿易赤字も市場が安定して、来期は黒字に戻りそうですし』

ザクタンク『まさか、狙つてやったとか……？』

エルメス『ないない。それは無いですよ。今回は偶然がたまたま重なっただけです。この先はもっと混乱しますよ』

ザクタンク『ハハ、そうですね』

ギボ『ちよつと！ いつまでも油売ってないで仕事してよ！』

ザクタンク『おつと。やれやれ、うるさいのが来た。じゃ、そろそろ始めますかな、内務大臣殿』

エルメス『はいはい、行政大臣殿』

ギボ『え〜、今回はちよつと厄介な相談です。フィールド上で装備品をPKプレイヤーに略取されたそうなんです、何でも持ち主に無断で使用したキャラだったそうで、被害者は装備品の返還を求めているんです』

ザクタンク『一部地区を除いて、この国ではアイテムの奪い合いを認めている。……まあ推奨はしていないが、べつに法に反してはいないだろ？ 何故そんな話を？』

ギボ『そうなんですけどね。盗られたって装備品が、その……非常に高額なんです。闇値（リアルでの売値。世界的に人気を博しているYMR世界で出現するレアアイテムや貨幣は現実でも高価で取引され、その儲けを専門に狙った略奪者や商人がYMR世界に多数存在し、しばしば問題になっている。YMRを企画したイギリス企業ヴェイン株式会社はプレイヤー達に厳重な注意を勧告しているが法的強制力は未だに無いため、実際では野放しになっているのが現状である）で二千万……』

ザクタンク『え……二千万？ それ……マジ？』

ギボ『マジです』

エルメス『ちよつと、いったい何のアイテムです？ 尋常な金額じやありませんよ！？』

ギボ『前々回のYMRで猛威を振るっていた魔王四將軍の1人、『バチツド』が所有していた、『バチツドの玉兇器』です。特殊効果は全魔法完全無効化』

ザクタンク『世界に一個しかない超レアアイテム？ それも2期前の？ すげえの持ってたなあ。宮仕えには一生お眼にかかれないモンだね。いやしかし、そんな大金出して買う人がいるとはね……』

エルメス『でも実際売れるんですよ。1円を盗んでも100万円を盗んでも泥棒は泥棒……なんて言いますが、やはり1円の盗人相手に司法は動かないですよ。現金なもので。でも千万単位となればもう、我々が介入すべき問題です。辺に噂が広がって上へ下へと大騒ぎ立てられる前に、ここはそのラッキーな盗人さんを召喚して穩便に返してもらいますか？ まあ、国庫からいくらか親切にする報奨金を出すということだ』

ギボ『そんな悠長なことで大丈夫ですか？ 取引される前に軍を動かして捕縛しましょうよ！ いますぐ！』

ザクタンク『あんまり無茶やったら、ますます人口が減ってしまわないか？』

ギボ『だからっ、悠長なことを言っている間に……！』

エルメス『金額の多寡に眼を奪われて僕達が規律を乱すわけにもいかないでしょう。僕達はいくまで第三者、中立な立場で物事を裁かなければなりません。軍は動かしません。当然でしょ？ とにかく使者を出して返還を呼びかけましょう』

ザクタンク『ま、妥当ですかな』

ギボ『……そ、そんなんだからッ！！ 後でどうなっても知りませんよー！』

ザクタンク『おやおや、怒らせてしまいましたな』

エルメス『この件は僕に一任してくれませんか？ 迷惑はかけませ

んから』

ギボ『……物好き』

立ち去ったはずのギボが戻って来た。

## 因果応報ハイエナ稼業

【ファルン王国・荒野のフィールド】

「ふう……」

ハイ・エルフの一団をどうにか始末した俺は一息吐く。

肌着程度しか身に付けていない俺のタクじゃかすただけでも即死だったろうが、遠距離攻撃に特化したハイ・エルフ達は接近戦が不得手だと踏み、徹底したイン・ファイトで“一撃必殺”を狙った。肌が触れ合うような距離から複数を相手に大立ち回り。

数分後には喉を掻き切られた死体が五つ。

俺はほぼ無傷だった。

「……………」

マップで周囲に敵の気配が無いのを確認し、乾いた赤土の上に横たわる死体からアイテムを回収するべく動く。不意に、青い無数の光輪が死体の前で噴き上がった。

「な……ん!?!」

突然のことに俺は息を呑む。

光輪の中から徐々に人の輪郭が浮かび上がり、光の輪が粒子となつて大気に溶けると、その中から出て来たのは……先ほどの”PK”ども。

竜調教師や邪覇剣士。

そして暗黒司教。

「キョラキョラキョラ……!! 逃げられませんよ……この包囲からはね。そして、この『DEATH』……からはね!」

暗黒司教が妙に皺枯れた声で俺に凄んだ。

厚く丈の長い丈夫そうな灰色のフードを目深に被り、青白く細枝のような腕に幾つもの宝石を誂えた金の腕輪をジャラジャラとさせ、暗黒司教『DEATH』は一斉に仲間を解き放った。

迅い！！

俺が身構えるよりも早く、一瞬にして視界から掻き消えた邪覇剣士二人が背後に回った。必死に逃げようと振り返るも、こちらの動きを予期していたかのように肩口に黒刀を突きつけられそれを封じられる。

『パーティー登録した人間とは、どこにいても”ポータル”で合流出来る……なんて初歩的なこと、寂しい寂しい単独プレイじゃ知らなかったかい？』

『……くっ！』

邪覇剣士の1人が下卑た笑いを浮かべた。

魔法やアイテムでパーティーが合流出来ることは知ってる。

でも逃げるのに必死で全然思い浮かばなかった。

どこを見ても敵、敵、敵、敵。絶体絶命のピンチだ。

どうあがいても逃げられる隙など見当たらない。

『ち、畜生ッッ！！』

イチかバチか、俺は転送ポータルの巻物をアイテムソケットから引っ張り出し、街への帰還を試みた。が、地面に放り投げた巻物が青紫色の光輪を浮かべた瞬間、何故かそれは光の粒となって掻き消えてしまった。

『??? な、なん……?』

驚愕に言葉を失ったその直後、DEATHの放った召喚魔導

『三つ首雷竜の紫電』ドライゼン・スベル・ヴェノムが俺を一瞬にして焼き焦がした。

暗転。

## 災い転じてハイエナ稼業

「クソッ！」

現実世界の俺は机を強打した。

やられた。完全にやられた。

死体に重なるように表示されたダイヤルログの『街へ戻りますか？』のYES/NOに従い、俺は半強制的に初期転送ポイントまで戻される。

奪い取ったアイテムがなんたるかをじっくり見る前に狩り殺されてしまった。クズどものアイテムなど物色せずにそのまま逃げれば……たぶん逃げ切れた。

痛恨のミスだ。

所持金0、経験値0、フィールドにブチ撒けたアイテムと装備品は今頃連中に物色されているだろう。

「……て、あれ？」

ふと、俺はPC画面に映るタクを見て眼を疑った。

外装に変化がない。衣服を纏いナイフを所持している。装備品がそのまんま。びっくりしてステータス画面を開く。とそこには高いレア度を示す緑や黄色表示のアイテムがズラリ。

『バヂツドの玉兇器』 レア度10

旧・人魔大戦で、人類側を恐怖に陥れた焔の魔王バヂツドが持つ、魔法完全無効化能力を秘めた碧の卵。

『邪神の籠手』 レア度9

聖神の雷により朽ちた古き邪神の腕。

常時8倍プロテクト。

最速クイック攻撃が可能。

『魔神の首飾り』 レア度9

異界神の黒き血、デモン・ブラッドの力を内に秘めた首飾り。

HPとMPの半分を消費して異世界より訪れし七の魔人のいずれかを召還する。

防御力三倍。

食事を摂らなくともステータスが減少しない。

凍結無効化。

『ガイナス・ヘルム』 レア度8

大陸を制覇した伝説の霸王『ガイナス・ラグールド』が頭上に頂く漆黒の兜。

イノセンス上昇。

ステータス正常のまま常にバーサク状態。

絶対の確率で物理攻撃カウンター。

85%の確率で魔法反射。

『デモン・プレート』 レア度8

地獄の業火によって鍛え上げられた白銀の鎧。

アイテム出現率70%上昇。

蘇生全回復確率80%。

ステータスや所持品を丸裸にされる『<sup>アンサー</sup>調査』を防ぐ。

『死海の宝玉』 レア度6

持つだけで幸せになる、深海微生物の集合体が化石化した白い宝<sup>玉</sup>。

ラック上昇40%。

50%の確率でステータス異常回復。

そして所持金235ボル。

「……………」

俺はしばらく呆然としていたと思う。

心臓がばくばく鳴って、キーボードを打つ指先が震えて止まらな  
い。

死亡したにもかかわらず何のペナルティも貰わなかった不可解な  
現象は置いといて、見たことも無いようなレア度の武器、防具、装  
飾品がアイテムソケットいっぱいに収まっている。

「やべえ、やべえよ……これはやばい……」

頭が混乱してきた。息は切れ、脈拍は定まらず、自然とひと気の  
無い場所へと足が向う。

何だか周りの人間全てが敵に見えた。

『護りのタリスマン』 レア度5

アイテムソケットに入れて置けば、死亡時のペナルティ帳消しと  
引き換えに消滅する。

## 死神の黒き三日月

YMRの世界は既存のオンラインRPGとは一線を画し、明確なエンディングが設けられたゲームだった。世界を支配する魔王を倒せばその時点でゲームは一時終了し、システムを刷新した次代のYMRへと移り変わる。

前回のYMRでは魔王『ヴィルザーク』討伐までに六年半かかり、優勝したチームには次期YMR世界での様々な特権の他、賞金2億ドル 現在の日本の貨幣価値にして200億近い金額が褒賞として与えられた。

賞金の額が額だけに優勝者の名前は希望により伏せられたが、そのチームの中に日本人の存在があったとまことしやかに囁かれた。

### 【ファルン島西部・ケイン活火山八合目・隠者宅】

冒険RPGであるYMRで作家として活動する男がいた。

その名も『武富士』。

YMRの窓口は想像以上に広く、馬鹿正直に冒険するプレイヤー以外にも、地味に盆栽育てたり、養鯉に奔ったり、学校に通って夜の校舎窓ガラス壊して回る退廃的日々だって送れる。武富士はそんな世界で文学に没頭していた。

何度かの失敗の後に自身の小説がそこそこヒット、今では悠々自適な暮らしを送る武富士。静寂を好む彼は王都から距離を置き、ファルン島内の山岳地帯を拠点とする魔王 焔産みの巨王『アルム・ガルム』の根城の真下に居を構えていた。

公式によると『アルム・ガルム』の全長は1万4800m。

巨王の二つ名に恥じぬ、常識の域を遥かに超えたその全容は未だようと知れず、岩盤のような岩肌の隙間から噴煙と劫火を撒き散らし、世界を灼熱の炎へと包み込む。

最近では、大陸から集った2千人規模の大パーティを一夜にして

壊滅状態に陥れたのは島民にとって記憶に新しい。

開始一年足らずの今現在では誰1人として『アルム・ガルム』には対抗できなかった。以上の理由からケイン活火山付近で人を見かけることは少ない。

少ないが……ゼロではない。

山の中腹に隠された秘密の洞窟。

ランタンの灯りを頼りに洞窟の奥へ奥へと進むと……鍾乳洞のよ  
うな広い空間に出た。

フットサルのフィールドくらいの広さはあるだろうか、吸い込ま  
れてしまいそうなほど高い天井には、今にも降り注いできそうな満  
点の星が瞬いている。

空間は何らかの力が働いているようで、完全に正常に保たれ、山  
を登ったことによる軽い低酸素症の『異常』<sup>バッド・ステータス</sup>が安定域にまで戻って  
来ている。

ひと心地ついて星の美しさにひと時心奪われていると、奥の方の  
ロツジから黒衣を纏った長身の男が現れた。

『やあ……キミか、めずらしいじゃないか』

『ひさしぶりだね』

抑揚の無い声で出迎えてくれたのは、”仮面ライダー”のような  
風貌の男であった。

闇色のマントに身を包み、何かの昆虫を模した漆黒の仮面を被っ  
ている。もしこんな街中で見かけたら、後ろからポンと肩を叩い  
て「らいだ」と言っても許されるくらいライダーだ。

彼こそが武富士。

かつて共に魔王を討ち倒した伝説の8人の内の1人で、そのとき  
は『レイク』と名乗っていたが、現在は『武富士』と改名したそう  
な。

神聖魔導を極めし『大司祭』であつたレイクは、普段ほのぼのしていながら、いざ戦闘になると誰よりもダーティーな攻撃を仕掛ける熱い男だつた。

近接戦闘に向かない補助系のキャラで、攻撃力耐久力ともに最強クラスのヘビーモスを相手に掴み合つて殴り合うような男だつた。

『この空間は面白いね。一体どうやってるんだい？』

『研究で半永久的に続く魔導構成を生み出した。この空間総てが共生関係にあり互いが必要不可欠な要素でサイクルしている』

『へえ！ 僕の家でもできるかな？』

『この場所限定だね。これ以上でもこれ以下でも駄目。何か欠けたり混じると永久の機能は失われてしまうんだ』

『そうか。残念』

魔法は既存の系統付けられたものから、組み合わせで新たに生み出すものがある。プログラムを組む膨大な量の専門知識と構成センスが問われるため、素人が簡単に手を出せる領域ではない。

入り口は広く奥は限りなく細い。

YMRの世界は日々変化する第二の現実なのだ。

洞窟の奥の部屋へ案内されると、そこは足の踏み場もないほど山積みとなつた旧世代の高位魔術書や怪しげな民芸品、未踏ダンジョンの手描き地図を丸めた物などに囲まれていた。

机の上の試験管やビーカーの中ではアルコールランプに熱せられ何か判らない蛍光色の液体が煮詰められているし、天井には『スカイ・フィッシュ』らしき骨格標本が針金で吊り下げられている。

『悪い悪い。今片付けるから』

バツの悪そうな感じでそう言つた武富士は、机の上の荷物を手早くまとめてそこら辺に放つた。

今放り投げた中にすごく貴重なアイテムがあつたような気がしたが……とりあえず促されるまま席に座り、武富士も足で周りのゴミを退かしながら対面の椅子に座つた。

『相変わらずだな。本業はどうした？』

『それはそれ、これはこれ。物書きは多趣味なのさ』

『まあいい。武富士、急な話だが預けていたモノを返して貰えるかな？』

『……』 ナンバー・サード・デス・サイエ “死神の黒き三日月”か』

武富士は嫌なものを思い返すように言い淀んだ。

開始から数十年を経て、参加プレイヤー2億8千万人を数え、なおも爆発的な増大を続けるYMR。その広大なる世界で幻と噂されている十二神器の1つ。それが『死神の黒き三日月』だった。

魂を刈り取る漆黒の大三日月。

この神器によって魂を奪われたプレイヤーは半永久的に甦生不能に陥り、使用しているキャラクターは二度とオンラインで使用できなくなる。

それは事実上、プレイヤーを強制的にアカウント停止に追い込める、課金制オンラインゲームの常識枠を大きく超越した、世界のバランスすら破壊しかねない悪魔の大鎌と云えた。

『封印を解く気か？ こんな危なっかしいモノは使いたくないからと言って……だから私に預けたんだろう？』

『1人……消えて貰わなければならない』

『だからと言って……それは間違いだ。こんなのは良くない。違つか？』

『その通り。だから、限定1人だけを即座に抹消する。そうしたら元通り封印するよ』

『……』

『決断ができないなら勝手に持って行くよ。あれは元々、僕のモノだからな』

『エイソウ影走……』

『今は”エルメス”と呼んでくれよ』

## 追い詰められてハイエナ稼業

【ファルン王都・城下街】

俺はプレイヤーの誰も彼もが自分を狙っているという疑心暗鬼に駆られ、大量のレアアイテムを抱えてまま城壁の外れまで来ていた。小一時間前のこと。

復活先の役場でお宝の無事を確認した俺は、動揺していたこともあって、落ち着くためにひとまずロフオフしようと思った。一階へ降りて、ロフオフ・ポイントである公衆電話の受話器に手を掛ける。そこでいきなり「あ、こいつ知ってるぞ！ 賞金首・ハイエナのタクだ！！」と 受付けに並んでた『コック・チャイルド宣教師』に指差される。『何イ！？』

『お尋ねモンかつ！！』

受話器を持ったまま啞然とする俺に対し、その場にいた警備員や賞金稼ぎや善意の第三者はいっせいに得物を抜き、取り囲んで来た。詰んだ……！？

頭が完全に真っ白になって、さすがに終わったと死を覚悟した次の瞬間 『待て』と、男の声があった。

人垣を押し割って前に出た男は、上半身裸でターバンを目深に頭に巻いた小男だった。

『おお、マイン・コア……！！』

『”マイン・コアの戟”ゲキ か！！』

誰それ？

とは言い難い状況なので固唾を飲む。

『せ、説明するぞ……！！』 “五核使い”のマイン・コアとは、地・水・火・風の四大精霊元素を魔鉄芯に込めて使う死神じゃ。鉄の杭で一度刺され、二度刺され、三度刺され、四度となるともう詰み……。最後の五本目を打ち込まれたとき、如何なる生物であろうと耐え切れん。五本目の起爆芯が打ち込まれれば、それによって、既に

打ち込まれた四大元素の芯核が連鎖反応して内部から超爆発を起こす。確実に死に至るのじゃあー!!」

「おおー!!」

「それはすごい!!」

隣に立っていたジジイが解説している間に脱出する俺。

よく訓練されたノリのいい冒険者達が大きく動揺の色を見せて聞き入ってくれたお陰でギリギリ脱出できた。ジジイの言うことはよくわからなかったが、要するにワリのいい「スカーレット・ニードル」(蠍の一刺し。十五回刺すと相手死ぬ。死ぬかも知れない)のようなモンか。

でも自業自得とは云え、お尋ね者の手配書きが最悪のタイミングでボディーブローを打ってきやがった。あの”宣教師(カツパ野郎)”……今度遭ったら後ろから浣腸エクセレントだ。

何とか路地裏へと逃げ込んだ俺は、壁を背に暗がりです息を殺し、追っ手の連中が通り過ぎるのをジッと待った。

PKプレイは所詮血塗られた道だ。

まともに表も歩けなくなってしまう。

こうなる前にもっとLvを上げときたかったんだが。

「居たか!?!」

「いや……だが、こっちで見かけた! アイツ、ヒョロそうなのに逃げ足が早いぞ!」

「人が多過ぎてマップじゃ見分けが付かん……」

地鳴りのような足音が通り過ぎ、辺りがシンと静まり返るを待つて、気配が完全に消えたのを確認した俺は……ようやく大きな息を吐き、その場にズルズルと崩れ落ちた。

「ふう……」

マジで終わったかと思った。

これからどうする?

一番安全なのはログオフしちまうことだが、めぼしいログオフ・ポイントはPKグループが既に押さえているだろうし、神騎士が保険に加入していれば”取立て屋”が動き始めているだろうし、神騎士かPKグループが役場に訴えて賞金額を吊り上げれば、追跡の手をさらに増やすことだってできる。

宿屋、マンション、教会、酒場、スポーツガーデン、電話ボックス……ログオフ・ポイントは探せばまだまだたくさんあるが、どれも街の中心にあって人通りが途切れることはない。

もう捨て値でもかまわないから手っ取り早く売り払おうとも考えたが、近くの専門店がギルド加入店ばかりで盗品は扱ってないし、露天やモグリの類に当たれば殺されて奪われるのがオチ。仲介を頼もうにも知り合いなんかいねえ。

俺みたいな貧相な外見の騎士に『<sup>アンス</sup>調査』を仕掛ける酔狂は居ないだろうが、はつきり言って怖エエ。

そんな次第で……逃げた先が城壁の外れ。

あんな恐怖は初めてだ。

俺はウンウン悩みながら城壁の周りを一時間くらいウロついている。

どうしようか……。

そのうち1つの案を思いついた。

このままじゃ逃げられない。

逃げられないなら、何処かに”隠しちゃう”か……と云う考えに至る。

後で思い返せば愚策中の愚策なのだが、追い詰められた人間というのは、たとえどんな小さな光にでも希望を見出してしまふモノなのだ。

そんなわけで俺は行動を開始した。

とりあえず、追っ手が一番待ち構えていそうな城門を上手く抜けるために外装を変える。この島のネイティブである『タンタナ族』に偽装することにした。連中は数が多いし面を着ける風習があるので紛れ込み易いだろう。

まずは全裸になる。

と言つても、ゲームの仕様でトランクス一丁までが限界だが。

泥水を全身に擦り付け、砂地でゴロゴロ転がり肌全体を白いキヤンパスに変え、花を搗り潰して赤い染料を作り、それを肌塗りに塗る。それから熱帯樹に登って、グローブのように大きな葉を数枚失敬して腰ミノにし、最後の一枚は覗き穴を開けて面にした。

『よし、カモフラージュ率100%』

一部の隙も無い偽装に満足いった俺は、腰ミノ一丁の半裸の状態で木陰に隠れ、お目当ての”タンタナ族”の一団が現れるのをジッと待った。

六時間後。

『来たあああツツツ!!』

俺は思わず絶叫して、慌てて口を塞ぐ。

夜陰にまぎれ、二十名ほどで列をなして城門へと向かうタンタナは、太鼓や笛の勇ましい音に鼓舞されるかのように雄叫びを上げ踊り狂っている。物質文明から遠ざかり、自然の木々や葉を衣装として身に纏う、太陽のような赤い肌を持つ勇猛果敢な種族タンタナ。

『ホウホウホウ!　ホウホウホウホウ!』

『ホウホウ!!　ホウホウ!』

今だ!!

『ボウツ!!』

俺は額に手を当てながら颯爽と立ち、重力を感じさせない巧みな

足捌きで滑るように後退しながら、さりげなく一団の最後尾に付く。  
『ホウ？』

前を歩くタンタナが俺に気付く。  
目ざといヤツだ。

『ポウッ！』

俺は突きつけるように顔を前に出した。

もう後戻りはできない。

『ホ、ホウ？』

『ポウポウポウ！！ ポオオオウッ！！』

『ホ…… ホウホウ？』

タンタナじゃない俺には何言ってるのかさっぱり解らんが、とにかく『ポウポウ』叫んで強引にねじ込む。人差し指でタンタナの胸元を激しく突つきながら、怯むのも構わず一方的にまくし立てた。

『ポウポウ！ ポウ！』

『ポ…… ポウ？』

『ポウ！ ポウポウ！』

『ポ……… ポウ！』

『ポオ〜ウ、ポウ！』

タンタナはちょっと釈然としない感じで首を傾げていたが、俺の必死な意気込みが伝わったのか、列に戻り再び雄叫びを上げ始める。列に戻ったタンタナが太鼓鳴らしているタンタナに、何勝手に”ポウポウ”言つてやがんだこの野郎的な感じで頭を殴られたが、とりあえず華麗なる脱出に成功だ。

ファルン王国は大陸と比較すれば小国と云えるサーバーだが、それでも大体ハワイ諸島ぐらいの広さがある。誰にも知られていない未踏の場所もまだまだ沢山あるだろうし、そういった場所にこっそりアイテムを”放置”しておけば、万全とは言い難いが、ひとまずは安心かも知れない。

どうするか……おそらく全部で十万円相当するだろうレアアイテムの山。フィールド上に放置などして大丈夫だろうか……悩む。苦悩する。だが時間もあまりない。

俺は決断した。

誰にも気付かれないよう痕跡を残さず、馬や騎竜などの足を借りず慎重に移動し、街から18kmほど先にある荒野に出現する『クアラ大湖』までたどり着くと、迷うことなく水の中へザブザブ踏み入り、腰の辺りまで進んでから、湖底にアイテムをそっと放った。

狩猟地から離れた辺鄙な場所。

フィールド上の10km前からは誰一人として遭わなかった。

これでとりあえず大丈夫だろうか。

この場所は俺しか知らない。

暗転でいいよな？

「ふう……」

無事ログオフして、俺は心底安堵の息を吐いた。手にじんわりと汗が滲んでいる。

略奪行為に関する何がしかの警告文がメールで送られていないか確認したが、特にそういう類のものは無かった。至って問題なし。

「なんだよ……脅かしやがって」

結構な高額だろうから管理者権限で強制返還を求められるかもと心配したが……まずは一安心か。

安心すると張り詰めていたものが一気に切れ、妙な笑いすら込み上げて来る。周りのことにも頭が回るようになって来る。

窓の外はもう真っ暗だった。

「うっ……」

俺は背骨をバキバキ鳴らしながら伸びをして、それからパソコンの電源を落とした。

腹が減ったので飯食いに外出する。

今日もたった独り。ロンリー・ディナー。  
るるらるら〜

このとき俺はまだ気付いていない。のんきに鼻歌など歌っている。俺が手に入れたアレが一体どれほどの価値の物か、今の俺はまだ知らない。

満腹になった俺はネットのことなどすっかり忘れ、家に帰ってからはＴＶのお笑い番組に爆笑していた。その日は疲れきっていたのでそのまま寝たが……次の日の朝、驚くべき結果が待っていた。

朝食を摂り終えた俺はパソコンの前に座り、学校へ行く前に、昨日かっぱらったアイテムがどのくらいの価値なのか確認することにした。湖底に隠す前に一応名前をメモっておいたので、ＹＭＲのアイテムや貨幣の取引情報を扱う裏サイトへ行つて検索する。

「死海の宝玉……と」

検索欄に名前を打ち込んでから検索ボタンをクリック。  
読み込みが始まる。

「……」

少しドキドキする。いやかなり。

心臓が昨日のテンションを取り戻していく。

### 【死海の宝玉】

現在価格取引 350円

ＹＭＲ取引価格 8万5000ボル

まあ……悪くは無いか。

こんなもんか？

入手は難しくないしな。

レートは大体100ボル1円が目安だが、武器やアイテムは市場の流通量や需要で価格は激変する。8万ボルに対して出た、レート

以下の350円は、このアイテムの入手がいかに楽かを伝えている。いたずら入札を避けるために端数は切っているらしいが……それにしてもシヨボイ。ちょっと期待外れだったが気を取り直し、次は一気にレベルを上げ、レア度9の『魔神の首飾り』を検索してみる。名前を打ち込んで……検索ボタンをクリック。画面に結果が表示される。

#### 【魔神の首飾り】

現在取引価格 85万7000円  
YMR取引価格 133億3400万ボル

「おお……」

画面に表示された凄まじい金額にしばし言葉を失う。

新型のハイスペック・パソコンが買える。オプションパーツもこもりで。これは予想外だった。体がちよっぴり震える。というか震えまくっている。

「うおお!! ありえねえ!?! さすがレア度9!! これマジ!?! 85万!?! ケタが違ええ!!」

驚くべき大金の到来に俺は半狂乱だった。興奮冷めやらぬ内に次の検索へ移る。

#### 【邪神の籠手】

現在取引価格 63万1000円  
YMR取引価格 88億4000ボル

#### 【ガイナス・ヘルム】

現在取引価格 92万3200円  
YMR取引価格 220億ボル

#### 【デモン・プレート】

現在取引価格 12万800円  
YMR取引価格 6億1000万ボル

レア度8の『ガイナス・ヘルム』が3年近く市場に出回っていないため、魔神の首飾りを上回る値段を付けていた。我を忘れて画面を凝視し、夢中でマウスをクリックする間、俺はずっと震えっぱなしだった。手も足も歯すらも力チ力チ鳴っていた。

予想をかなり上回る予想外の連続に、俺は完全に正常な判断を失っていた。裏ページを閉じて即座にYMRに繋ぎ、サーバーを選択して専用キャラクターを起ち上げる。

あんな高価な物が湖に放置されているなんて……もう居ても立っても居られなかった。

値段が付いている物は取引待ちということ。

現実に買主は既にいる。

速攻でアイテムを拾って来て……何とかして売り払えば……幾らだ？

に、250万円ぐらい……？

「……………」

転送中に怖くなってわずかに冷静さを取り戻した俺は、自分の早計に気付き早々にログオフした。

駄目だ。今街に出たら捕まる……。

子供の小遣いじゃない。額が額だ。昨日今日の事件でほとぼりが冷めるわけがない。

アホか。先走りやがって。度し難い馬鹿だよ。盗んだのは昨日の今日のことだぞ。メールに連絡が来なかったからって、どうして安全だと言えるんだ？俺をおびき寄せるために罠かも知れねえだろ。

冷静になれ。

まずは冷静に深呼吸だよ。

アイテムはこっちが握ってるんだ。どんな天文学的確率であの湖の底に人が来ると言うんだ？

俺はリクライニングを利かせ、とにかく落ち着こうと天井を仰いだ。深呼吸しても考えが定まらず全身が硬直している。なんといい小物ぶり。我ながら情けない

## 信濃川とハイエナ稼業

「あれでもねえ……これでもねえ」

俺は学校に行くのも忘れ、アイテムの処遇についてあれこれ思案していた。

大抵の取引は、取引相手と何処かで待ち合わせて、金とアイテムを手渡して交換するのがポピュラーだ。だが大金が動くとなれば……これだな。

まず双方が仲介屋にアイテムと金を預ける。仲介屋は仲介料を差し引いた金を俺に振込み、アイテムは取引相手に引き渡すシステムこれが最も安全だ。規制のユルい外国なんかじゃ、堂々と法人化されているオンライン仲介屋までいる。

” Y M R 仲介屋 ” で検索すると、怪しいのから株式会社までズラリと出て来た。

俺は追われる身だからしばらくファルンにログイン出来ない。放置しているアイテムの詳細な場所を教える代わりに、取引の一切を代行してくれる信頼できる仲介屋……この条件で探すとちよつと見当たらない。

「むづ……」

椅子の上で行儀悪くあぐらをかき、ページをスクロールして片っ端から仲介屋を吟味する。そうやってしばらく探していると……ようやく御眼鏡に適うのサイトに巡り会った。

” 仲介屋・信濃川 ”。

ホームページの入り口には古臭い木目調の看板があり、筆を使つたような達筆でそう書かれていた。中央には二階建てのプレハブ小屋とおぼしき貧相な会社写真が貼ってあり、ページの左隅には会社の住所、電話・FAX番号、古物商免許の登録番号などが記載され

ている。

「どうやら仲介業だけじゃなく、中古品の売買や修繕などで手広く商売している個人経営の何でも屋のようだ。最寄駅から電車で1つの近所だし、会社がちゃんとあるか自分の目で確認できるな。」

(…………ここに決めるか?)

ひとまずの候補として信濃川を選んだ俺は、地図を印刷して四つ折りにして仕舞う。

「よし。じゃあ、学校…………行かないとな」

本棚の置き時計を確認するともう昼前だった。

落ちこぼれにゃガミガミ言わない進学校だから別にいいけど。

放課後。

学校が終わってから直接会社の視察に行くことにした俺は、ゲーセンやカラオケ目当ての帰宅部に混じって駅前へと向かった。受験期間中ずっとネットゲ断ちしていた反動で、ここ最近四六時中ネット漬け引き籠もりに近かったから、駅方面に来るのは随分久しぶりだ。

『武血殺死地獄坂駅』。

…………まあアレだ。

ちよつと残念な駅名が書いてある最寄駅前は、どこにでもある素朴な駅前だ。少しの緑と、ガードレールに沿って並ぶ乱雑な放置自転車と、田舎っぽく無駄に大きな駐車を構えた中型ブックストアがあるだけ。

俺は券売機に90円入れて隣町までの切符を買った。一度急行を見送ってから電車で揺られること1分半、隣町の『捻殺死煉獄駅』へと辿り着いた。

「ねじィィ、ころしィィ、れんごくう、えきィィ。ねじィィ、ころしィィ、れんごくう、えきィィ。お荷物のお忘れのないようにお気をつけ下さい」

やたらドス利いた声を響かせる駅員のアナウンスを背に、地元

一歩も引けを取らぬ極悪な名前の駅を出る。

捻殺死煉獄町は古くからの町並みを保ち、自然との調和を大切にし、寺や坂道が多く、山道へと続く路は自転車のツーリング・コースなどにも用いられている。凶悪そうな名前からは想像もつかない穏やかな土地だ。

「さてと……」

俺は胸ポケットから四つ折りの地図を出して広げる。出かける前にプリントアウトした信濃川の地図によると、場所は最寄り駅から徒歩12分。再開発を控えた閑静な新興住宅街の外れにある、公園前の寂れた広場に建っているようだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1880z/>

---

外道の王

2011年12月10日23時47分発行